

【B年】聖霊降臨節第13主日(2023年8月20日)

【旧約聖書日課】アモス書 5章18～24節

- 18 災いだ、主の日を待ち望む者は。
主の日はお前たちにとって何か。
それは闇であって、光ではない。
- 19 人が獅子の前から逃れても熊に会い
家にたどりついても
壁に手で寄りかかると
その手を蛇にかまれるようなものだ。
- 20 主の日は無闇であって、光ではない。
暗闇であって、輝きではない。
- 21 わたしはお前たちの祭りを憎み、退ける。
祭りの献げ物の香りも喜ばない。
- 22 たとえ、焼き尽くす献げ物をわたしにささげても
穀物の献げ物をささげても
わたしは受け入れず
肥えた動物の献げ物も顧みない。
- 23 お前たちの騒がしい歌をわたしから遠ざけよ。
豎琴の音もわたしは聞かない。
- 24 正義を洪水のように
恵みの業を大河のように
尽きることなく流れさせよ。

【使徒書日課】ヤコブの手紙 1章19～27節

- 19 わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。20 人の怒りは神の義を実現しないからです。21 だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。
- 22 御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。23 御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。
- 24 鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。25 しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行いの人です。このような人は、その行いによって幸せになります。26 自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。27 みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です。

【福音書日課】ルカによる福音書 13章1～17節

1 ちょうどそのとき、何人かの人に来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。2 イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。3 決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。4 また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。5 決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

6 そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。7 そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』8 園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。9 そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

10 安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。11 そこに、十八年間も病の靈に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。12 イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、13 その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した。14 ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない。」15 しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。16 この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」17 こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなさった数々のすばらしい行いを見て喜んだ。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

アモス書 5章18～24節

- ¹⁸ 災いあれ、主の目を待ち望む者に。
主の目があなたがたにとって一体何になるのか。
それは闇であって、光ではない。
- ¹⁹ 人が獅子の前から逃れても熊に遭い
家にたどりついて、手で壁に寄りかかると
蛇にかみつかれるようなものだ。
- ²⁰ 確かに、主の目は闇であって、光ではなく
暗闇であって、そこに輝きはない。
- ²¹ 私はあなたがたの祭りを憎み、退ける。
あなたがたの聖なる集いを喜ばない。
- ²² たとえ、焼き尽くすいけにえを献げて
穀物の供え物を献げて
私は受け入れず
肥えた家畜の会食のいけにえも顧みない。
- ²³ あなたがたの騒がしい歌を私から遠ざけよ。
豎琴の音も私は聞かない。
- ²⁴ 公正の水のように
正義を大河のように
尽きることなく流れさせよ。

ヤコブの手紙 1章19～27節

¹⁹ 私の愛するきょうだいたち、よくわきまえて
おきなさい。人は誰でも、聞くに速く、語るに遅
く、怒るに遅くあるべきです。²⁰ 人の怒りは神の義
を実現しないからです。²¹ それゆえ、あらゆる汚れ
や甚だしい悪を捨て去り、植え付けられた御言葉
を謙虚に受け入れなさい。御言葉は、あなたがた
の魂を救うことができます。

²² 御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、
ただ聞くだけの人であってははいけません。²³ 御言
葉を聞いても行わない者がいれば、その人は、自
分の生まれつきの顔を鏡で映して見る人に似てい
ます。²⁴ 自分を映して見ても、そこを立ち去ると、
どのようであったかをすぐに忘れてしまうからで
す。²⁵ しかし、完全な律法、すなわち自由の律法を
一心に見つめて離れずにいる人は、聞いて忘れて
しまう人ではなく、行う人になります。このよう
な人は、その行いによって幸いな者となるのです。

²⁶ 自分は宗教に熱心であると思っても、舌を制
することをせず、自分の心を欺くならば、その人
の宗教は空しいものです。²⁷ みなしごや、やもめが
困っているときに世話をし、世の汚れに染まるこ
となく自分を守ること、これこそ父なる神の御前
に清く汚れない宗教です。

ルカによる福音書 13章1～17節

¹ ちょうどその時、ピラトがガリラヤ人の血を彼
らのいけにえに混ぜたことを、イエスに告げる者
たちがいた。² イエスはお答えになった。「そのガ
リラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほ
かのすべてのガリラヤ人とは違って、罪人だっ
たからだと思うのか。³ 決してそうではない。言っ
ておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じ
ように滅びる。⁴ また、シロアムの塔が倒れて死
んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるほか
のすべての人々と違って、負い目のある者だっ
たと思うのか。⁵ 決してそうではない。あなたがたに言
う。あなたがたも悔い改めなければ、皆同じよう
に滅びる。」

⁶ それから、イエスは次のたとえを話された。「あ
る人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実
を探しに来たが見つからなかった。⁷ そこで、園丁
に言った。「もう三年もの間、このいちじくの木
に実を探しに来ているのに、見つけたためしがな
い。切り倒してしまえ。なぜ、土地を無駄にして
おくのか。」⁸ 園丁は答えた。「ご主人様、今年も
このままにしておいてください。木の周りを掘っ
て、肥やしをやってみます。⁹ もし来年実を結べば
よし、それで駄目なら、切り倒してください。」

¹⁰ 安息日に、イエスはある会堂で教えておられ
た。¹¹ そこに、十八年間も病の靈に取りつかれて
いる女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ば
すことができなかった。¹² イエスはその女を見て
呼び寄せ、「女よ、あなたは病から解放された」と
言っ、¹³ その上に手を置かれた。女は、たちど
ころに腰がまっすぐになり、神を崇めた。¹⁴ ところ
が会堂長は、イエスが安息日に病人を癒されたこ
とに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六
日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息
日はいけない。」¹⁵ しかし、主は彼に言われた。「偽
善者たちよ、あなたがたは誰でも、安息日に牛や
ろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて
行くではないか。¹⁶ この女はアブラハムの娘なの
に、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安
息日であっても、その束縛から解いてやるべきで
はないか。」¹⁷ こう言われると、反対者は皆恥じ入
ったが、群衆はこぞって、イエスがなさったすべ
てのすばらしい行いを見て喜んだ。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・8月20日「聖霊降臨節第13主日」の日課主題は「信仰の証し」。

・旧約聖書日課は、「アモス書」から、祭儀批判預言と呼ばれる箇所の一部。使徒書日課は、「ヤコブの手紙」から、御言葉を行う信仰について説く箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、悔い改めと滅びについて教えられた箇所、および安息日の癒しについて議論となったことを伝える箇所。

旧約日課(アモス5章より)

・「アモス書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」に区分される「十二預言者」の中で第三に置かれた預言文書。「預言者アモス」については、冒頭1:1に定型的な紹介が付されている。それによれば、「預言者アモス」は、エルサレムの南方20キロほどに位置する「テコア」出身の「牧者の一人」で、「ユダの王ウジヤ」(=アザルヤ。在位=前783~742年頃)と「イスラエルの王ヤロブアム」(在位=前786~746年頃)の時代に起こった地震(前760年頃)の直前に「イスラエル」で預言活動をした人物とされている。「テコア」は、寒村とされる場合もあるが、エルサレム防衛上の要害でもあり、この地の人々とユダ王国ダビデ王家との関りは「旧約」各書でたびたび触れられる。「牧者(ノーケード)」は、直接羊の世話に携わる「羊飼いで」はなく、「遊牧民の首長」などを指す(王下5:4「モアブの王メシャ」に付される「羊を飼育し」は「ノーケード」)。ウジヤ王およびヤロブアム王の治世はほぼ重なるが、この時代は南北両王国が外敵の脅威をほぼ受けず軍事的・経済的に安定と繁栄を謳歌していた。「アモス」の預言は、ユダ王国(南王国)に関連するものも含まれるが、大半はイスラエル王国(北王国)に関連するもので、特にイスラエルの王国神殿として位置づけられていた「ベテル」に対する批判が顕著である。

・アモスの預言を理解するためには、当時の南北両王国における宗教勢力(神殿祭司集団)の政治的影響力という背景を知っておく必要がある。北王国は、前842年頃に軍司令官イエフがオムリ王朝を打倒して新王朝を樹立、ヤロブアム王の時代まで安定した王権を維持したが、このイエフ王朝を当初から背後で支えたのは「エリシャ」ら地方聖所を拠点とする祭司集団であり、その中心にベテル祭司団が存在した。北王国でオムリ王朝が倒れた際、南王国ではオムリ家から嫁いだ太后アタルヤが実権を握りダビデ王家の正統な後継者をことごとく抹殺しようとしたが、ヨアシユがそれを逃れて後に王位に就くことができたのは、エルサレムの神殿祭司ヨヤダらの画策によってであった。ヨアシユ王は、王位に就くと神殿祭司団を制御しようとするが、最期は家臣の反乱によって暗殺されてしまった。結局、ヨアシユに続くアマツヤ王、アザルヤ王(ウジヤ王)、ヨタム王らは、エルサレムの神殿祭

司団の宮廷政治に対する影響力を排除できなかったと推認される。その後が続くのが、アハズ王、ヒゼキヤ王であり、祭司イザヤが宮廷預言者として政治的発言力を有していたことが伝えられている。ところで、この時代の南北両王国の関係は、決して良好なものではなく、南王国アマツヤ王は北王国と軍事衝突を起こし、敗北している。アマツヤ王の子であるウジヤ王(アザルヤ王)は、この敗北を機に、事実上北王国の意向で(つまり傀儡王として)王位を継承したと考えられる。このような時代背景の中で、アモスは、ユダ王国ダビデ王家の家臣団かそれに準ずる立ち位置の者として、事実上北王国に従属していた南王国が自立を図るべく、反北王国プロパガンダとして預言活動を展開していたとも考えられるのである。その際、サマリアの王権と共に北王国の権力のもう一つの中枢であったベテル祭司団もまた批判の対象となったのであろう。

使徒書日課(ヤコブ1章より)

・「ヤコブの手紙」は、「公同書簡」と呼ばれる一連の書簡文書の一つ。差出人として名を記される「ヤコブ」は、3世紀以降、初代エルサレム教会で「柱と目された三人」に数えられる「主の兄弟ヤコブ」であるとみなされてきたが、現代の聖書学者の中には偽書を疑う者が多い。「主の兄弟ヤコブ」は、主イエスの弟で母や他の弟妹らと共に主イエスの旅に同行するようになり、主イエスの復活後の使徒たちの教会にも加わっていたと考えられている。当初は、使徒たちの影に隠れた存在であったが、使徒たちが各地に展開し、残っていた使徒ヤコブも殉教すると、エルサレムの教会共同体で事実上の指導者になったと推察される。教会伝承やユダヤ社会の伝承では「義人ヤコブ」としてその名が知られており、「イエスをメシアとする」ことを除けば正統な伝統主義のユダヤ教徒と認識されていたとされる。本書簡の内容も、ユダヤ伝統主義の傾向が強いものと解され、宗教改革者M.ルターはこれを「藁の書」と称して正典から除外することを試みている。しかし、「マタイ福音書」の「山上の説教」などと共通する理解が見られるなど、初期教会共同体内に存在した一つの主要な党派であったことは間違いない。

・日課箇所は、本書簡の基本的な主張でもある「御言葉を行う人になる」ことが、端的に教えられている。このような発想は、「山上の説教」に典型的に見られる。本書簡の特徴は、むしろ後段で展開していくような「舌のもたらす罪」を避けること、「舌を制御する」ことに現れてくる。

・「自由をもたらす完全な律法」に似た発想は、パウロも「ガラテヤの信徒への手紙」で展開している(ガラテヤ5-6章)。

・26節「信心深い(スレースコス)」、26-27節「信心(スレースケイア)」は、「崇敬」を意味する語で、いわゆる宗教的な態度を指して言われている。

福音書日課(ルカ 13 章より)

・日課箇所は、ガリラヤ人虐殺の噂を巡る対話とそこから展開したたとえ話で構成される前半(1~9 節)と、安息日に病人を癒したことを巡る議論を伝える逸話の後半(10~17 節)に分けられる。前半部は、前段 12 章の設定場面に含まれる。前半部と後半部には、それぞれ「十八人」と「十八年間」という表現が出てくるが、この数字が両方の箇所を結びつける何らかの役割を果たしているようには考えられない。日課箇所はすべて「ルカ福音書」に特有の記事で、他の福音書は伝えていない。

・1 節で触れられる「ガリラヤ人の血」の事件は、後 31 年春に巡礼団としてエルサレム神殿に来ていたガリラヤ人集団の起こした暴動に対する総督ピラトの徹底した武力鎮圧を指すと考えられる。後 6 年に始まったユダヤ地方に対するローマの属州化は、ガリラヤ地方を拠点としてユダヤの独立を目指す過激派(いわゆる「熱心党」)の活動を惹起し、繰り返し暴動が生じていたが、10 年間総督の地位にあったピラトは特に厳しく対処していたことが伝えられている。

・5 節「いちじくの木」は、一般に栽培を始めてから 2 年ほどで実を収穫できるようになる。ぶどう滓を肥料にして栽培する方法も知られている。

・安息日の癒しを巡る論争は、各福音書が伝えており、「ルカ」は共観福音書で並行して伝える逸話を別に伝えている(6:6 以下)。日課箇所では、緊急性によらず、「束縛から解放してやる」べきこととして、安息日の働きを肯定することが主張されている。

来週の誕生日 (8 月 20 日~26 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-8 番「心の底より」(= I 26 番「こころを傾け」)は、16 世紀宗教改革の時代にプロテスタント陣営の傭兵として生きたゲオルグ・ニーゲがルターの「朝の祝福の祈り」に触発されて作詞したとされる「朝の讃美歌」。曲は、民謡の旋律からの編曲。

・21-484 番「主われを愛す(愛の主イエスは)」(= □ 124、□ 461)は、19 世紀米国の文筆家アナ・B・ワーナーが姉との共著書の中に挿入歌として創作し、後に、同時代の米国を代表する教会音楽家 W・ブラドベリーによって曲が付けられ讃美歌集「Golden Shower」(1862 年出版)に収録された。原歌詞は 7 節ある。日本では、1872 年に開催された滞日宣教師会議の際にジェームズ・バラが女性宣教師ジュリア・クロスビーの日本語訳を示して歌われたのが最初の記録で、その後、多くの訳が作られた。「主われを愛す」の訳は 1903 年版『讃美歌』から採用されてきたが、『讃美歌 21』では新訳が示されている。

・21-514 番「美しい天と地の造り主」(= I 449)は、20 世紀カナダで YWCA 活動に従事したメアリー・エドガーがキャンプソングとして作詞した歌詞。曲は、19 世紀英国教会司祭プリンジャーが趣味で作曲して残した曲の一つ。

21-8「心の底より」**Aus meines Herzens Grunde**

1. Aus meines Herzens Grunde / sag ich dir Lob und Dank / in dieser Morgenstunde, / dazu mein Leben lang, / dir, Gott, in deinem Thron, / zu Lob und Preis und Ehren / durch Christus, unsern Herren, / dein eingebornen Sohn,
2. dass du mich hast aus Gnaden / in der vergangnen Nacht / vor Gifahr und allem Schaden / behütet und bewacht. / Demütig bitt ich dich, / wollest mir mein Sünd vergeben, / womit in diesem Leben / ich hab erzürnet dich.
3. Du wollest auch behüten / mich gnädig diesen Tag / vors Teufels List und Wüten, / vor Sünden und vor Schmach, / vor Feur und Wassersnot, / vor Armut und vor Schanden, / vor Ketten und vor Banden, / vor bösem schnellem Tod.
4. Gott will ich lassen raten, / denn er all Ding vermag. / Er segne meine Taten / an diesem neuen Tag; / ihm hab ich heimgestellt / mein Leib, mein Seel, mein Leben / und was er sonst gegeben; / er machs, wies ihm gefällt.
5. Darauf so sprech ich Amen / und zweifle nicht daran. / Gott wird es alls zusammen / in Gnaden sehen an; / und streck nun aus mein Hand, / greif an das Werk mit Freuden, / dazu mich Gott beschieden / in mein Beruf und Stand.

21-484「主われを愛す(愛の主イエスは)」**Jesus loves me, this I know**

1. Jesus loves me! this I know, / for the Bible tells me so; / little ones to him belong, / they are weak, but he is strong.

Refrain:

- Yes, Jesus loves me, / yes, Jesus loves me, / yes, Jesus loves me, / the Bible tells me so.
- Jesus loves me! he who died / heaven's gates to open wide; / he will wash away my sin, / let his little child come in. [Refrain]
- Jesus loves me! he will stay / close beside me all the way; / when at last I come to die, / he will take me home on high. [Refrain]

J.N. クロスビーの日本語訳(1872 年)より 1 節

エスワレヲ愛シマス、サウ聖書申シマス、彼レニ子
 供中、信スレバ属ス、ハイエス愛ス、ハイエス愛
 ス、ハイエス愛ス、サウ聖書申ス

21-514「美しい天と地の造り主」**God, who touchest earth with beauty**

1. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / With thy Spirit recreate me / Pure and strong and true.
2. Like thy springs and running waters, / Make me crystal pure; / Like thy rocks of towering grandeur, / Make me strong and sure.
3. Like thy dancing waves in sunlight, / Make me glad and free; / Like the straightness of the pine trees / Let me upright be.
4. Like the arching of the heavens, / Lift my thoughts above; / Turn my dreams to noble action, / Ministries of love.
5. Like the birds that soar while singing, / Give my heart a song; / May the music of thanksgiving / Echo clear and strong.
6. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / Keep me ever by thy Spirit / Pure and strong and true.